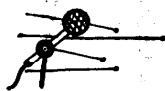


講演



社会の成熟化と情報化社会†

林 雄 二 郎††

1. 社会の成長と成熟化

現代の日本は工業化社会における成長過程から成熟過程への過渡期にある。ここで、社会が成長過程にあるか成熟過程にあるかを判定するためのものさしとして、エントロピとエネルギーの二つを用いる。

すなわち、社会が成長過程にあるときには、その社会のエントロピは減少し、エネルギーは増大するが、それが成熟化するにつれて、次第にエントロピ増大、エネルギー減少の方向に転換してゆく。したがって、成長過程から成熟過程への過渡期にあるときには、両者の要素がモザイク的に混在するであろうから、社会は総じて不透明になり、不確かな動きを見せることが多く、見透しや予測がはなはだ困難であることが多い。現代の日本がまさにそうである。

エントロピ、エネルギーはいずれも社会的な変化の方向からマクロ的に観察することであって、すなわち、エントロピは“無秩序さ”とし、エントロピが減少(増大)するとは、社会が全体として秩序形成(崩壊)に向かって変化していると観測される場合とする。また、エネルギーは民族的、社会的な活力ということであるからエネルギーが増大(減少)しているときには、社会が全体として拡大(縮小)的になり、外向(内向)的な傾向を強めることが観測される。

日本についていえば、日本が工業化社会に転換したのは、明治以降のことであるが、それ以前の日本は農業社会であった。而して、農業社会としての成長過程は13~4世紀ごろの、いわゆる戦国時代から徳川幕府が成立し、幕藩体制が確立したと見られる鎖国開始の頃までに目され、鎖国下の二百数十年は成熟過程であったと思われる。明治以降、工業化社会としての新しい成長過程がはじまり、それが今日まで、約1世紀余にわたってつづき、1970年代に入って、ようやくそれが成熟過程に転換しはじめたと見る。恐らく、1980年

代、1990年代とそれがつづき、工業化社会の次の社会といわれる脱工業化社会に脱皮するのは21世紀も、かなり進んでからではないかと思われるが、それはここではふれないでおく。

2. 成熟化社会の特徴

工業化社会の成長過程でどのような問題が提起されてきたか? 前述のごとく、成長過程においては、社会が活性化し、国内的には高度大衆消費社会の実現に向かって市場を拡大し、国外的には全地球上に市場をひろげてゆく、そしてそれは必然的に競争をひき起こす、成長社会は競争社会でもある。しかも、工業という産業は、それを農業とくらべると、農業がミニ・プロダクション、ミニ・マーケットの産業であるのに対して、工業はすぐれてマス・プロダクション、マス・マーケットの産業であるといえる。

その結果、必然的に起こってきたことは、国内的にも国外的にも、さまざまな異なる価値観との出会いの機会が増大するということであった。それはまた必然的に、さまざまなコンフリクト、摩擦をひき起こすことになる。しかし、成長過程においては、それらの摩擦、コンフリクトに対して、ほとんど、何ひとつそれを解決するてだてをしてこなかった。競争社会においては、そのようなことにかかわりあうことは、しばしば、競争におくれを取ることもなりかねず、また、競争社会とは弱肉強食の社会でもあり、競争に勝つことが、すべての摩擦やコンフリクトを解消するゆえんでもあり得たからである。

しかし、成長過程から成熟過程に転換してゆくにしたがって、すべての摩擦、コンフリクトが、あらためて顕在化してくる。成長社会が競争社会とすれば、成熟社会は、さまざまな異なる価値観を共存させ、調和させることを可能とする、いわば共存と調和の社会でなければならない。“さまざまな異なる価値観を共存させ、調和させることを可能にする”ということは、それを現実化し得るような、さまざまなシステムが正

† 情報処理学会第22回全国大会特別講演(昭和56年3月24日)

†† (財)未来工学研究所副理事長

しく設計され、それが社会の中で正常に作動していなければならない。すなわち、さまざまな異なる価値観の共存と調和が、倫理的な課題として存在するのではなく、技術的な課題として存在している社会でなければならない。ただし、そのためには、技術の境界領域が拡大しなければならない。

3. 成熟過程における生産性と有効性

さまざまな異なる価値観を共存、調和させる——しかもそれを倫理的な対象としてではなく、技術的な課題として実現してゆくというのは、これを要するに社会の中に混在しているさまざまな価値観に基づいたニーズそれぞれに対して正しくこたえることが可能であるような社会的システムをつくり、それを社会の中にしっかりと組みこむことがなされなければならない。

社会的システムの設計は最近とみに発達してきているが、これを大別すると、管理型のシステムと参加型のシステムとの二大別できよう。前者は、最大公約数的なニーズにこたえることを目的とし、後者は、原則としてどのようなニーズに対してもこたえられるものでなければならない。ところが、後者のシステムは、当然のことながら、経済的にはきわめて割高な、つまりはなほだ非効率なシステムにならざるを得ない。これが今日までこの種のシステムの実現を妨げてきた原因で、結果的には管理型のシステムしか実用化せず、それがシステム化即管理社会化であると批判の矢を向けられてきたゆえんであった。

そこで、前述のような参加型のシステムの実用化こそが、異なる価値観の共存と調和のために必要になってくるわけなのであるが、そのためには、この非効率性の壁をどうしたら越えられるかを考慮しなければならない。

成長過程における技術進歩の第一のよりどころは、生産性であった。生産性の向上こそは、常に技術進歩の変わることなき目標であった。生産性の高い技術は、低い技術より優位に立ち得た。それが競争であった。そして、この生産性という道標は、今後もなお依然として存続しつづけるであろう。しかし、成熟過程においては、進歩の道標は生産性だけではない筈である。もう一つの道しるべ、——今仮にそれを有効性 (effectiveness) と名づけよう。この二つの道しるべが、成熟過程の社会においては不可欠の道標となるのではないだろうか。

この有効性というのは、ニーズに対するカバレッジ

の広さ、つまり参加性の大きさを示す指標ということになる。生産性と有効性とは、したがって、明らかに背反する原理をそれぞれに内包していて、そこで、この二つをともに百パーセントみたくすることはあり得ないであろう。そのシステムの目的に応じて、それぞれにそれがどの程度みたされるべきであるかが検討され、それによって、それぞれの経済性がきまってくる。つまり、現実システムを作動させる時のコストがきまってくることになる。

いずれにしても、従来は有効性という指標は存在していなかったのであるから、この指標を確立することによって、従来、主として経済的な原因で日の目を見なかったようなシステムが市民権を獲得し得るということになる。

4. 先進工業国、日本の課題

有効性指標が指標として確立するためには、より広い範囲にわたって、それが存立し得るような社会的な慣行やルールが整備されなければならない。すなわち、税制であるとか、会計規則であるとか、商習慣とか、関連法規の整備等々、要するに社会的な仕組みがすべてそれを許容する——というよりも、それを促進するようになっていなければならない。

更に、それは、日本一国だけで完結し得る問題ではなく、いわゆる国際競争力を構成する要素として、この有効性指標が重要なキー・インデックスになっていなければならない。そうなるように国際的な話し合いを進め、先進工業国同士はいうまでもなく、発展途上国に対しても了解を得るようにしてゆかなければならない。何故ならば、このような問題は、ひとり日本にとっただけの課題であるのみでなく、より一般的にすべての工業国にとって共通の課題である筈だし、異なる価値観の共存と調和ということは、発展途上国をも含めて、全世界的な課題であるからである。すなわち、工業文明が、名実ともに世界文明となりおせたことによってひき起こされた。必然的な課題であり、異なる価値観の共存と調和のためのシステムが、世界的な規模でつくられていないからこそ、今日の世界があらゆる面で安定することができないでいるわけなのである。したがって、それは、まさに今日の世界的課題というべきであり、この世界的課題をひきおこした原因か工業国による工業文明のひろがりにあることは明白なのだから、日本が工業国の一員として、いま率先してその答えに挑戦することは、自動車問題などよりも。

もっと根本的な課題への挑戦であるといわねばならない。工業国としての共通の課題であるにもかかわらず、アメリカにしても、ヨーロッパ諸国にしても、どこもまだ、なんら具体的な答えを出すことに成功していない。日本がその間にあって、欧米諸国に先んじて、なんらかの答えを出すことに成功したならば、それぞれ、日本の世界に対する責任の一端を果したことになる。日本もいつも欧米の後塵を拝してばかりいないで、先鞭をつけることをしてみたらどんなものだろうか。

5. コンピュータによる新しい日本語の発生

工業化社会が成熟過程に転換するということは、工業化社会を完成させるために必要不可欠である。さきに農業社会においても、二百数十年間の江戸時代は成熟過程であったことを前述したが、その間に農業社会として見事な仕上げをしたことを見落してはならない。成長過程から持ちこされた宿題を解決するために、成熟社会は重要な役割を果たしたのであったが、それは工業化社会における場合には、更に緊急な問題である。

而して、前節で述べた社会的技術の開発や、それをより確実なものとするための“有効性”概念を確立して、従来の生産性と並んで進歩のための二大指標たらしめることは工業化社会の仕上げのために是非とも必要なことであるが、更にもう一つ、新しい文化を形成するために科学技術が積極的に寄与すべきであるということも工業化社会の仕上げの一つのステップとしてきわめて重要な意味を持っている。江戸時代が農業社会の仕上げをしたということの、最も具体的なアウトプットは、まさにこの文化の形成、つまり農業社会における文化の形成という点で、まことに見事な成果をあげたのであるが、ここでは触れないでおく。

さてそこで、文化という言葉の定義であるが、ここでは、それを“ある人間集団の中での人間相互の対応の仕方”と定義する。これは、人類学における定義であるが、最も分かりやすく、また最も射た定義のように思われる。すなわち、人と人との出会いの時に日本人はおじぎをするが、欧米人は握手をする。これは両者の文化の違いを示すものである。したがって、それぞれの民族の言語はそれぞれの民族の文化の象徴であるといわれるがもっともな話である。たとえば、日本語には敬語という独特の言葉がたくさんあったり、また、一般に日本語の文章、特に会話のその場合は、一人称、二人称、三人称を明示する言葉のな

い場合が多く、誰が誰に対して言っているのかがはっきりしないといったようなことが特に外国人にとっては日本語を難解ならしめているようであるが、このような日本語の特徴は、まさに日本人の人間相互の対応の仕方の特徴、すなわち日本の文化の特徴をそのまま示しているものにほかならない。

ところで、文化の定義を前述のように認識すると、人間の生活環境が変化してくれば、たとえば現代の工業文明のごときは、人間の生活環境を変化せしめた最大の要因であったが、このような環境の変化は、とりもなおさず、それに応じて文化も変わってこなければならぬことを物語るものである。

今日までの工業文明の著しい進歩によって、文化の大衆化にそれは大きな寄与をしてきた。たとえば TV その他のマスコミ技術の進歩によって、多くの人々は居ながらにしてさまざまな文化財や芸術に接し得るし、印刷や複写技術の進歩も似たような体験を可能にしてくれる。このような文明の進歩によって文化の大衆化が可能になったことを、仮に文化の文明化と名づけるとすると、来るべき成熟過程においてもとめられるのは、その逆の文明の文化化とでもいうべきことであろうか。

文明の文化化とは、新しい文化をつくりあげようとするときに、既存の工業文明の成果をすべて肯定し、それをフルに活用しつつ新しい文化をつくりあげることである。例をあげてみよう。

さきに言語——日本についていえば日本語ということになるが、これは日本文化の最も象徴的なものであると言った。ところが、最近この日本語が非常に荒廃してしまつたとよくいわれる。もともと、言語は社会の変化に伴って変わってゆくものであり、日本語もその例外ではないが、最近の著しい現象として、社会の中にさまざまなシマができてしまつて、それぞれのシマの中でだけしか通用しないような日本語がふえてきた。同じ日本語でありながらシマが違うとうまく通じないという現象がだんだんひろがってきつづつある。このような現象をひき起こすといった原因は、あまりにも急速な工業文明の進展による社会の変貌のためであろう。

ところが、このような現象の中で、最近、注目すべき新しい現象があらわれた。それは、コンピュータにおける日本語による情報処理である。将来、コンピュータによる音声のパターン認識の技術の進歩によって、コンピュータが家庭に入りこみ、コンピュータの日常化が普及するにつれて、コンピュータは急速に日

本語化してゆくであろう。そのときに予想されることは、コンピュータが、いままで多くのシマにわかれて、それぞれに特化しかけていた日本語をどのように結びつけるかということである。いずれにしても、これは、現代の多くのシマの中に、更にコンピュータ社会という新しいシマをつくりだすという方向に向かうのではなく、多くのシマを結ぶという方向をとるであろうということである。どのシマにも通用するけれども、どのシマにも属さない、という形になってゆくであろうということである。

このような方向に向かって、コンピュータの日本語化が進んでゆけば、それはまぎれもなく、コンピュータによる新しい日本語の誕生であり、新しい文化の創造である。私は将来、コンピュータが新しい標準語としての日本語を生み出すのではないかとさえ思っている。それを私は第三の標準語と名づけている。“第三”の標準語と名づけたゆえんは、さきに日本は二つの標準語を生みだした経験を持っているからである。明治の新政府が、義務教育を推進してゆくにあたって、国定教科書を媒介として標準語を普及させたことは今日よく知られている。

義務教育をするためには、地方ごとに異なる方言でできあがっている日本語をそのままの形にしておくことは具合が悪い。しかし、それならば何をもって共通の日本語たらしめるか、それは明治新政府にとってはなほ厄介な問題であったようである。薩長藩閥政府といわれた政府であったが、むしろ薩摩や長州の方言を標準語とするのははばかられる。そんなことをしたらほかの地方の人々の反感を買うことは必至だからである。同じような理由で、政府が東京に所在しているからといって東京の方言を標準語とするわけにもゆかず、京都の言葉を標準語とするわけにもゆかない。そこで、国定教科書に述べられる日本語は、よくいわれるように東京の山の手言葉を土台としているようでありながら、必ずしも東京の山の手言葉ではなく、要するにどここの言葉でもない一種の国籍不明の言語であった。それが国籍不明であったからこそ、どここの地方に対しても等しい距離を保つことができた。そして、さしたる抵抗もなく、それがいつか標準語としての地歩を確立することができたのであった。

ところが、このような経験は、実は明治の新政府の初めての経験ではなかった。江戸時代以前の日本で全く同じような経験を経ていたのであった。すなわち、江戸の幕藩体制の中で、標準語というような呼称こそ

存在しなかったかも知れないが、機械的には全く標準語としての機能を保持しつづけてきた“日本語”があった。それは漢語漢文であった。一見それは隣国の中国の言語のように見える。しかし、決して中国の言語ではない。日本人はそれに返り点だの送り仮名だのをつけて、完全に日本語読みにしてそれを理解する。むしろ、だからといってそれが純粋の日本語でないことはいうまでもない。これを要するに日本人のいう漢文とは、まぎれもない国籍不明の言語であった。国籍不明の言語であったからこそ、多くの日本人にとって違和感なく受け入れられたのであろうと思う。

思うに、標準語、共通語たるべき最も重要な、そして最も基本的な条件は、それが国籍不明であるということであるのではないかと思う。その意味で、前述のコンピュータの日本語は、どのシマにも属さないが、どのシマにも通用するというものである筈で、これは要するに、これも一種の“国籍不明”の日本語ということになりそうである。とすれば、さきの江戸時代以前の日本における漢文が第一の標準語、明治新政府が国定教科書を媒介として普及させた現代の標準日本語が第二の標準語、そしてコンピュータの日本語は第三の標準語となり得るのではないかと思ったのである。コンピュータという工業文明の成果を活用しながら、新しい文化をつくりだす。これこそ私のいう文明の文化化にはかならない。

6. 大量生産型と異質の“富士山型の技術”

今日までの成長過程の中で、工業文明の進展は、社会を画一化することを促進してきたが、今後の成熟過程の中で、新しい文化が形成されてゆけば、それはまぎれもなく、多様化を促進することになるであろう。何故ならば、文化とはすぐれて個性的なものであるからである。今日までの文化の文明化は明らかに社会の画一化に通ずるものであったが、文明の文化化は、それが進めば進むほど画一化とは反対の方向に向かってゆくであろう。文化の文明化の主役はさまざまなハードであったが、文明の文化化の主役は明らかにハードウェアでなくてソフトウェアでなければならない。そしてそれは個性化を促進することを約束するであろう。

そして、そのことは、前述の“有効性”指標の提唱にも通ずるものである。

技術の進歩が、その結果として画一化を促進するのではなく、多様化を促進するようになるのであるとすれば、そのような状況のもとでは当然、従来のよう

な、大量生産型の技術が主導的な役割を果たすのではなく、他の性格が主導的な科学技術として要求されるようになる筈である。私の考えでは、新しく主導的な役割を果たすようになる技術は、そのもの自体は必ずしも大量生産の対象にはなり難いが、技術関連のきわめて多い、いわば、ひろい裾野を持った技術ということになるのではないかと思う。さまざまな社会システムの開発や、新しい文化の形成などを含む、いわゆる社会開発技術は、当然前述の新しい技術のフロンティアの中に取り入れられるべきであろう。このような、新しいタイプの技術を、仮に“富士山型の技術”と名付けるとすると、前記の社会開発技術のほかに、たとえば、スペースシャトルの成功で新たな脚光を浴びつつある宇宙開発技術や、海洋開発技術、遺伝子工学で注目をあつめている、いわゆるバイオインダストリ等はいずれも富士山型の技術をベースにした産業といえるであろう。どの場合でも、今日まで主導的役割を果たしてきた大量生産型の技術とは異なる技術体系を持った産業であることは間違いない。

7. 文明の文化化とコミュニティ・メディア

今までに述べてきたようなことを前提として、工業化社会の成熟過程を展望してみると、そのような社会は、一種のモザイク型の社会になる筈である。モザイク型というゆえんは、さまざまな異なる価値観が、異なる価値観として共存しているということである。異なる価値観が渾然一体となって一様化するのではなく、明らかに異なる価値観として、そのまま存在しながら、全体として鳥瞰すれば、どこにも不調和なところもなく、見事に調和している。モザイクの床を見ればその意味がよくわかるであろう。モザイクを構成する素片は、それぞれにもとの色を持ったままの小片でありながら、それが全体として見れば、どの素片の色にも異なる別個の色調を発揮している。モザイクとはそういうものである。その点が成長過程の社会と成熟過程の社会との違いではないかと思う。成長過程では、生産性を唯一の道標として、もっぱら大量生産型の技術をベースとした産業に主導されてきた。その結果は必然的に画一化をもたらさずにはおかない。いわゆる都市化と称された現象はそのような画一化を意味するものであった。

情報技術の面からいえば、情報化とはもっぱら情報伝達技術の開発であり、全国的なネットワークの形成がその目標とされた。そして、伝達された情報を、ど

のようにフィードバックするのは主なる対象とはならなかった。したがって、情報化社会は、社会の画一化を促進するものであるとされた。たしかに情報化の進展による現象として、流行の全国的な傳播の促進、画一的知識の浸透等をあげることができる。これもまた、いわゆる都市化のひとつの結果であるとされたものである。

しかし、いかに画一的な情報にさらされる機会が増大したとしても、それは必ずしも画一的な認識を結果するとは限らない。むしろそれは異なる認識を誘発することを促進するといえないであろうか。さきに、文化の文明化ということ述べた時に、今日までの工業文明の発達によって、文化の大衆化が著しく進んだことを述べたが、このことは、一見、画一的な文化が形成されるように見えるけれども、実は決してそうではなく、多くの人々が、そのような擬似体験による画一的な文化との接触によって、かえって、実体験をしたいという欲求に拍車がかかり、文化の文明化は、文化的欲求充足感よりも、文化的欲求不満を促進する結果になっていることを想起してみる必要がある。画一的な情報伝達の結果もこれに似たようなことがいえそうである。文化の文明化は、かくして、それが必然的に文明の文化化という逆の現象をひきおこすトリガーとなったことと同じように、画一的な情報の伝達は、かえって一種の情報ギャップを誘発する誘因となっていたのである。それが、さまざまな機能をベースとした、いわゆるファンクショナル・コミュニティを対象としたコミュニティ・メディアの誕生であり、それを具現化する技術的手段として、たとえばデータ通信、キャプテンシステム、CATV等々のニューフェイスがある。光産業の技術進歩は更に多くの技術的可能性を開拓してゆくであろう。これらはいずれも前述の私の用語を使わせていただくならば文明の文化化の具体例となるものであろう。この場合、TVの受像器や、コンピュータ、電話器等々はいうまでもなくハードウェアであるが、これらのハードウェアが、ハードウェアとして誕生したのはいずれも新しいことではない。しかし、それらの既存のさまざまなハードウェアを結び、連動させて新しい可能性を引き出す役割を演じているのはソフトウェアである。本来は全国的なネットワークを形成し、画一的な情報伝達をしてきたハードウェアをつかって、新しいソフトウェアを開発したことによって、全く新しいコミュニティ・メディアが開発され、そのメディアの中で、従来は一方通行のコミ

コミュニケーションを行ってきたものが、双方向のコミュニケーションを可能としたわけである。そして、それによって、さまざま異なる価値観が、異なる価値観を前提として対話が可能になったわけであり、どの価値観に対しても、平等にフィードバック機能が機能するようになった、ということができる。これは明らかに社会のモザイク化と称さるべきものであって、嘗てのネットワークが形成したものと基本的異なるものであることを見逃してはならない。

8. 工業化社会の成熟と脱工業化

工業化社会の成熟過程は、工業化社会を上げるといふ意味においてきわめて重要な意味を持っている。成長過程で提起されたまま未解決の課題をどのように解決してゆかか、それはまさに成熟過程で果たさなければならないことである。“工業化社会を上げる”という表現をとったゆえである。

しかし、成熟過程は、エントロピ増大、エネルギー減少ということからもわかるように、これがそのまま、いつまでも推移してゆけば、そのような社会は必然的に自滅する可能性を持つ。少なくともそのような危険性をはらんだ過程であることは明らかである。

現に幕末の頃の日本もそうであった。幕末から明治のはじめにかけて、直接、欧米社会を遊歴した先覚者達、たとえば福沢諭吉の書きのこした「文明論之概略」などを一読するとき、誰でもがおどろかされるのは、その強烈な危機感である。まごまごしていると日本は亡んでしまうという切迫した危機感である。思うに、当時、ヨーロッパの国々やアメリカ等は、まさに工業化社会の成長過程のさ中であつた。日本よりも一世紀も早く産業革命を経験したヨーロッパ、そして、すぐその後からヨーロッパを追っていたアメリカは、いずれも工業化社会の成長過程の最盛期を迎えつつあつたであろう。エントロピ減少、エネルギー増大の炎は燃えさかっていた。はちきれんばかりの民族的活力の息吹き、ぐんぐん膨脹してゆく社会的なエネルギー、そういう空気に直接触れながら、ひるがえって祖国日本をながめた時、何とそこには長年にわたる泰平の波の中におぼれ、エントロピはすっかり増大し、エネルギーはもう底をついてしまっている。だらしのない遊惰の民が昼寝をむさぼっている姿が浮んでくる。こんなことではひとたまりもなく食われてしまう、という危機感にさいなまれたであろう福沢諭吉等の姿を想像することは難しくない。たしかに、すでに二百数十年にもわたる

成熟過程を経過してきた当時の日本は、まかり間違えば亡国の危険性をはらんだ危機一髪の状態であつたことは事実だつたのではないかと思う。

しかし、同時に、当時の日本が、農業社会を見事に上げていたからこそ、やがて迎えた明治維新で、おどろくほど小さな犠牲で、見事に工業化社会にテイクオフをすることができたのだと思う。もし、この“仕上げ”が不完全であつたら、工業化社会へのテイクオフは決してあのようにスムーズにはゆかず、多くの混乱と、多くの犠牲を伴つてもなお、その後の工業化社会の成長過程は、あのように見事な軌跡を印することはできなかったのではなからうか。その意味で、江戸時代は、明治以降の日本の軌跡を正しく理解するためには、もっと深く分析される価値のある時代であつたと思う。今日、東南アジアの国々をはじめとして、多くの発展途上国が、工業化を目しながら、必ずしも所期の目的を達し得ず、あらためて、日本の成功の理由が世界の奇跡とされていることはよく知られている。私の見るところでは、今日、多くの発展途上国が工業化へのテイクオフが思うにまかせないゆえんは、その前の段階、すなわち農業社会としての仕上げがいずれも不完全であることにあるのではないかと考えている。

それはさておき、日本が、いま、工業化社会の成熟過程に移行しつつあるということは、同じような危険性——そのまま自滅してしまうおそれがあるという危険性が次第に増大してゆくであろうということにもなる。成長過程におけるダイナミズムは社会の中から漸次減少してゆくであろう。そしてやがて完全に静態的な状態に到達してしまうと、それは社会の死を意味する。そうならない前に、次の社会すなわち脱工業化社会にテイクオフをしなければならぬ。うまくテイクオフできれば、ここで再び新しいダイナミズムを取り返し、新しい成長がはじまるであろう。明治期の日本を想起するまでもなく、このテイクオフを成功させるためには、まずその前に工業化社会を完全に仕上げおかなければならぬ。そのために成熟過程は不可避の過程であるといわねばならないのである。

最後に一言付言しておくが、世上よくいわれる、いわゆる脱工業社会論なるものは、私の主義によれば、それは悉く工業化社会の成熟過程についての論議であつて、真の脱工業化社会論はまだ全く登場してきていないと思う。私自身、脱工業化社会は、工業化社会の次の社会というだけで、それがどのような社会であるべきか、全くわからないというのが正直な告白である。